

マックス・ダウテンダイ『琵琶湖八景』管見  
 — 文学性と絵画性と —

八 亀 徳 也

A View on 'Eight Scenes of Lake Biwa'  
 by Max Dauthendey  
 —its literary and pictorial nature—

Tokuya Yakame

Max Dauthendey (1867-1918), German poet, novelist and playwright, visited Japan and stayed for a month during his world tour from 1905 to 1906, and published 'Eight Scenes of Lake Biwa', a literary work associated with the Japanese classic cycle pictures 'Eight Scenes of Omi' in 1911. It consists of eight independent short stories based on the original scenes, and is subtitled 'Love Stories of Japan'. They are 'like fairy tales' and 'exotic and erotic love stories'. Dauthendey incorporated in these stories, 1) Japanese shrines and temples, Buddhist images, and legends, 2) Japanese society and the citizens' lives, 3) current events, 4) issues concerning different cultures and races, and other important topics, and tried to make each story like a pictorial work. For example, he expressed his intention most successfully in the 7th story 'the Sunset in Seta', and discussed the scenery or the pictorial aspects most extraordinarily connecting the scenery with the 'emptiness' of traditional Japanese rooms in 'the Autumn Moon in Ishiyama'. In this sense, we have to highly evaluate the pictorial nature of this work as well as his talent as a painter.

## I. 作者について

マックス (マクシミリアーン)・アルベルト・ダウテンダイは、1867年7月25日、ダゲレオタイプ (銀板写真法) をドイツやロシアに導入したことで知られる写真家、機械工で且つ光学器械職人のカール・アルブレヒト・ダウテンダイを父に、ピョートル大帝の時代にロシアに移住していたドイツ人家系出身の娘、シャルロッテ・カロリーネ・フリードリヒ (旧姓) を母として、ドイツのヴュルツブルクに生まれた。折しも、フランス、イギリス、ロシアなどの列強国に比べて未だに諸邦分立の状態にあったドイツで、北のプロイセンがビスマルクの統率下で次第に国力を増強して、先ずオーストリアに戦勝し(1866年)、北ドイツ連邦を樹立させたばかりであった(1867年7月1日<sup>1)</sup>)。この時期は文学史的には写実主義の時代で、先行のロマン主義を否定し、社会の現実<sup>1)</sup>に目を向けてこれをありのままに描こうとする作家たちが主流を占めていた。

もともと学業が苦手であった少年ダウテンダイに父親は家業を継がせようと3年間彼をアトリエで使うが、幼少時より夢想家で定住意識が薄く、また画家を志していた息子は父の実践的な仕事を嫌い、結局最後には父も折れてしまう (後にダウテンダイは、借金に困って父のアトリエを売却する)。作家として住んだベルリンを皮切りにダウテンダイは、スウェーデン、ミュンヘン、ロンドン、パリなどヨーロッパ中を転々とし、各地の文人と交わる。スウェーデンではストックホルムの豪商の娘、アニー・ヨハンソンと知り合ってこれと結婚し(1896年)、1897年から98年にかけて彼女と一緒にニューヨークとメキシコに旅行する。1905年には一旦故郷のヴュルツブルクに落着くがそれも束の間、1905年12月から1906年8月にかけて、エジプト、インド、中国、日本を経て、ハワイ、アメリカ本土へと渡り、ロンドンを經由して帰国するという長駆の旅を成し遂げる。1914年4月26日、彼は再びアジア旅行に出、スマトラ島、ジャワ島、ドイツ領ニューギニアまで達するが、この年の7月28日に勃発した第一次世界大戦の為に捕われの身となって抑留生活を余儀なくされ、本人のみならず本国の妻や友人たちの努力も実を結ばず、マラリア感染症と望郷の念を抱えながら、1918年8月29日、ジャワ島のマラングで客死する。

彼の作品には、二つの長篇小説、『ヨーザ・ゲルト』(1893) とメキシコ旅行の産物『獣人』(1911)、ドイツの演劇界でもかなり成功した戯曲『ある女帝の戯れ』(1910) や、本稿で取り上げる『琵琶湖八景』(1911) のようなアジアを舞台にした物語のほか、多くの短篇小説や詩集がある。

## II. 『琵琶湖八景』の構成と特徴

ダウテンダイの『琵琶湖八景』成立に、江戸時代から伝わる絵画作品の『近江八景』が直接の契機になったことには疑いの余地がない。彼は1906年(明治39年)4月23日に長崎港に着き、約1か月日本に滞在し、5月24日に横浜港を出航しており、その間4月26日から29日まで京都に留まっているが<sup>2)</sup>、しかし、彼がいつ、どこで『近江八景』の作品に接したか、ないしはそれについての情報を得たか、更には果たして京都から琵琶湖まで足を伸ばしたかどうかは明らかではない。

『琵琶湖八景』は以下のような、それぞれ独立した8つの短かい物語で構成されている(各々のタイトルの後のカッコ内に、絵画作品で使われている対応の画題を付記する。但し本稿では、「矢橋の帰帆」のように「の」のついた通称を使用することにする)。

第1話：矢橋の帆船が夕方に帰るのを見る(矢橋帰帆)

第2話：夜雨が降るのを唐崎で聞く(唐崎夜雨)

第3話：三井寺の晩鐘を聞く(三井晩鐘)

第4話：アマズ(ママ)の陽光とそよ風(粟津晴嵐)

第5話：雁の飛翔を堅田で見送る(堅田落雁)

第6話：秋月が昇るのを石山で見る(石山秋月)

第7話：瀬田の消え行く夕焼け(瀬田夕照)

第8話：比良山の夕雪を見る(比良暮雪)

上記のような、主として湖南の8つの名所の風物を利用しながら、ダウテンダイは独自の物語を創作、展開している。しかし『琵琶湖八景』にあっては、それぞれの主題は必ずしも一つのストーリーの重要な導き手にはなっていない。それらはむしろ単に作者が物語を説き起こすためのきっかけ、あるいは背景として役立っているに過ぎない。例えば、第3話の「晩鐘」や第6話の「秋月」などは、モチーフとしての力が甚だ薄弱である。例外としては、第7話の「夕照」と第8話の「暮雪」を挙げることができよう。これら二つのモチーフは、使われ方こそ違え、それぞれの作品の中で重い意味を担わされている。

我々はそれよりも、作品の副題 „Japanische Liebesgeschichten“ (日本の愛の物語)の方に注目すべきであろう。すなわち、この作品では全篇を通じて „Liebe“ (愛)が様々な形で表現されている。ちょうどバロック音楽における通奏低音のように、愛のテーマが全ての物語の中を貫いている。例を挙げれば、第3話の「三井の晩鐘」では、秦の始皇帝の命を受け、不老長寿の薬を求めて日本へ来たという徐福の伝説を思わせるアタ・モノなる中国人が登場する。彼は

柳の樹皮に不老不死を得る方法を読み解くが、東方から飛んで来た杉の幹に刻まれた謎の文字は理解できない。数百年後、日本のある僧がこの文字を解説すると、それは「愛は不死よりも<sup>3)</sup>尊い」という意味であった。また第5話の「石山の秋月」には、国王の一途な愛を賢明な家来たちが知恵を働かせて潰してしまったために国に太陽も月も昇らなくなって語られる、「なぜなら愛は知恵よりも全能であるから<sup>4)</sup>」という表現がある。

もともと、これら8つの物語はあくまでも„愛の物語“であって、近代文学に見られるような„恋愛小説“ではない。なぜなら、『琵琶湖八景』の愛の物語には、愛し、擦れ違い、また時には憎しみ合う男女の心の襞の繊細な心理描写も、男女間の生き生きとした、ほのぼのとした、あるいはまた激しい調子のやり取りも、そしてそれらを囲む現実社会、その中で様々な蠢く人間たちの日常生活の描写もほとんど皆無だからである。

そもそも『琵琶湖八景』には、非現実的な存在を登場させ、異常な現象を描き、登場するものに超常的・超自然的行為を行なわせる、童話的な、奇想天外・荒唐無稽な話が非常に多く、更には唐突で急激な場面転回、話の流れとは直接関係のないエピソードもある。以下、それらの幾つかを拾ってみよう。

第1話（「矢橋の帰帆」）——主人公のハナケに恋した、皇太子の使者が突然、琵琶湖で鴨猟をしていたアメリカ人（!）の弾に当たり死ぬ。／長崎から連れて来られたオウムが、「私はあなたを殺す」と二度言って下女に締め殺された瞬間、ハナケが失神から覚める。

第2話（「唐崎の夜雨」）——唐崎の漁師の息子キリは、夢にだけ現れる幻の女性を結婚相手として憧れているが、ある夜、湖に漁に出たとき、怪しげな光の中でこの女性の声を聞く。／夢から目覚めたキリがその女性の声に唆されて湖に網を打つと、西洋人の将校の死体、手足、頭、大砲の砲身、銃剣などが上がって来る。

第4話（「粟津の晴嵐」）——真夏の昼、空が晴れ、アマズ（ママ）のそよ風が吹くとき、琵琶湖は満開の桜の枝に覆われた緑の牧場と化し、湖がうっとり陶酔している間だけ、人々は湖上を歩くことができる。しかし、「粟津の晴嵐」の幸福感を半秒でも長く味わおうとする者は水底深く沈まねばならない。

第6話（「石山の秋月」）——日本の北の町ハカタテ（ママ）で漁が行なわれたとき、ひとりの人魚が捕えられた。この人魚は、「浜辺で蛙や蟷蛙と一緒に歌を歌う人魚<sup>5)</sup>」とは異なり、深海に住んでいたもので、これまで海面にまで上ったこともなければ、陸や太陽、月、雲も見たことがなかった。／京の東本願寺と覚しき寺の棟上げに際し都中の女性が自分の髪を提供し、これから強い綱が作られたが、ある貴族女性が坊主頭になってしまったことを嘆き悲しんだために寺の仏たちの不興を買い、自分の娘が禿頭で生まれて来る、

という罰を受けた。果たして坊主頭で誕生した子供はそのまゝ成長し鬢をつけて結婚もするが、無毛の頭であることがやはり悲しくて親に相談する。そこで母親が再度我が毛髪を寺に寄進して仏たちの赦しを得、更に、娘が石山で満月を眺めれば頭に毛が生えて来るであろう、とのお告げを受け、事実娘は頭髪を授かる。

このように『琵琶湖八景』は、我々の現実からかなり遊離した世界を叙述している。前述した「愛」のテーマにしても、必ずしも一般的、常識的な形で具体化されていない。男女の愛がメルヒェンの次元を超えて、もはやエロチックな境地まで達しているケースもある。例えば第6話「石山の秋月」のように、北の深海から引き上げられた人魚を、国王が首都に帰る船上で三日三晩閉じ込め切り切りで愛し続け、遂には人間の女になってしまうという話。あるいは第7話「瀬田の夕照」では、夫を戦争で亡くした未亡人が、偶然三十三間堂で通し矢をしている、亡夫に似た男性と出会い、早速その直後に5000体(!)の仏像の頭上の屋根裏の硬い床で交わる、という経緯が描かれている。

巷間、『琵琶湖八景』は „エキゾチックな愛の物語“ (exotische Liebesgeschichten) と呼ばれている。しかし上記のような特徴を加味するならば、この作品はむしろ „メルヒェン的で、エキゾチック＝エロチックな愛の物語“ (märchenhafte, exotisch-erotische Liebesgeschichten) と称するべきであろう。

### III. 『琵琶湖八景』の中の話題

『琵琶湖八景』は如上の特徴的な枠組みの中で、更に次のような話題や問題点を提供している。それらは、1. 日本の寺社、仏像、ならびにそれらに纏わる伝説、2. 日本の社会と市民生活、3. 時事あるいは時局の問題、4. 異文化・異人種間の問題、である。これらの諸点はもちろん、ドイツの読者にとって日本を知る興味深い情報であり、エキゾチシズムの源泉ともなっているが、作者ダウテンダイにあっては、始めてアジアを、そして極東の日本を見た旅行者として、どうしても言及せざるを得なかったであろう問題点であり、彼の観察と思索の結果であったと言える。

#### 1. 日本の寺社、仏像、伝説

およそ作品中で述べられている、あるいは想像され得る寺社全てを列挙すると、「三井の晚鐘」の三井寺、「堅田の落雁」の京都のさる山寺、「石山の秋月」の石山寺と東本願寺、そして「瀬田の夕照」の三十三間堂、興福寺の北円堂か南円堂と思われる堂宇、東大寺および日光東照宮である。この内、三井寺と石山寺は既にタイトルで使われているが、ストーリーにはあまり関係

がなく、北円堂もしくは南円堂と思われる建物も一回触れられているだけである。

東本願寺にせよ三十三間堂にせよ、その寺号がはっきりと挙げられている訳ではない。しかし、前者については先述のように女性の毛髪に関わる逸話が語られており、作者が、この毛髪を縛って作られた、いわゆる „毛綱“ (Haarstrick) を実際に見たことを信じさせるくぐりもある。<sup>6)</sup> また後者については、次の描写が十分推論させてくれる。

京都の五千体の軍神の寺には、十列の長い列にそれぞれ五百の直立した黄金の神々が立っている。一人一人の神は 20 本から 30 本の腕を持っていて……<sup>7)</sup>

ある日その女性が再び祈りに酔って御堂を出たとき、その百フィートの長さの御堂に沿って伸びている外の板敷廊下に、一人の男性が立っているのが見えた。その男性は、日本人がよくやるように、ここで弓の稽古をしていた。<sup>8)</sup>

この女性、すなわち第 6 話「瀬田の夕照」の主人公で瀬田に住む落魄貴族の女性は、戦争で失なった夫と二人の息子を追想するために、夏と桜の季節に三十三間堂、東大寺、日光東照宮へ巡礼することになっているのであるが、亡夫を偲んだ三十三間堂の後奈良へ、そしてその後日光へ参詣する。長男を追悼する奈良と、次男に祈る日光の描写にはやゝ観光ガイド的な趣もある。既に京都から奈良まで鉄道が敷設されていたあの時代、作者ダウテンダイは自分の体験通りに筆を進めたのであろうか。旧国鉄奈良駅から登って来たらしい主人公は、先ず興福寺の一部、次に春日大社の参道およびその脇道に林立している石灯籠、そして奈良公園の至る所で遊ぶ鹿を見て、最後に大仏殿に至る。他方日光東照宮では、作者は無論主人公に陽明門その他の派手な建物、三猿、眠り猫を見させることを忘れない。このような観光案内めいたくぐりには、既に述べた三十三間堂の「五千体の」仏像のほか、東大寺の大仏が「赤銅色に金めっきされている」<sup>9)</sup>、「寺門の上の 3 匹の有名な猿」<sup>10)</sup>、「この右手の白い猫が絵師によって描かれている。それは眠っているようであり、もう数百年も眠っているのである」<sup>11)</sup>の類の、事実と反する表現が見られる。もっともこれらが、作者の記憶違いなのか、それとも意図的な変更なのかは決定し難い。

むしろ興味深いのは、ダウテンダイが基本的に日本の神と仏を区別していないことである。なるほど彼は、東大寺の大仏を「日本で最も巨大な仏像の一つ」(eines der riesenhaftesten Buddhbilder Japans)<sup>12)</sup>と形容してはいるが、東本願寺の仏像たちは「寺の神々」(Tempelgötter)<sup>13)</sup>、本尊は「千倍の祝福を与える女神」(tausendfach segenspendende(n) Göttin)<sup>14)</sup>であり、三十三間堂では、「もし京都がいつか敵に攻撃され、非常な窮地に立つような

ことがあれば、そのとき五千体の神々が長い木造の御堂から出陣し、古い帝都を守るであろう<sup>15)</sup>とされているのである。

確かに日本では、神と仏を合体させる歴史は古しいし、第6話「石山の秋月」の貴族女性がその不満ゆえに仏から仕打ちを受けたように、「仏罰」という言葉もある。またダウテンダイが、三十三間堂の十一面観音像群の裏側に立つ二十八部衆の中の、忿怒に満ちた勇ましい仏像から強い印象を受け、そこから「軍神」(Kriegsgenien)<sup>15)</sup>の発想が生まれた可能性も否めない。しかし日本人の民間信仰では、神は何よりも「人間に畏怖と不安を喚起するもの」<sup>16)</sup>であり、人々を守護する一方、他方では崇めるものであるのに対し、仏は何と言っても慈悲と寛容の存在であり、「崇りの鎮静」<sup>17)</sup>を為す存在と見做されているのである。

## 2. 日本の社会と市民生活

ダウテンダイは1か月間の滞日中、長崎、神戸、京都、名古屋、箱根、東京、日光、横浜、という風に西から東へ移動しながら、<sup>18)</sup>様々な土地と人々、そして彼らの生活ぶりを観察したことであろう。

彼の描く日本の民家は、西洋人の目から見れば当然のことながら、粗末そのものである。例えば第1話「矢橋の帰帆」には、「軽い鳥籠のような竹の家々」<sup>19)</sup>、「その小さな竹の家」<sup>20)</sup>、あるいは「ハナケの家の、紙の窓と竹の戸」<sup>21)</sup>なる表現が見られる。このような描写の仕方は、我々の心の中で、当時の貧しい日本のイメージと結びつく。しかし彼は、日本人の質素な生活ぶりを必ずしも軽蔑してはいない。1906年5月12日に日光から義姉宛に書いた手紙の中で彼は、「すべての日常事の慎しみ深さときめ細かい堅実さは神々しいのです」<sup>22)</sup>と記し、日本は「生活するのに理想郷でありましょう」<sup>22)</sup>とまで言い切っている。また東京の人々を見た彼は同じ手紙で、「そしてそこで人々は蜜蜂のようにつつましく生き、勤勉に数学的正確さで生活の楽しみと向き合い、常に最小の中に大きなものを実現しているのです」<sup>23)</sup>とも述べている。

恐らくダウテンダイは、日本での列車による旅の途中で見たのであろうか、「瀬田の夕照」の女主人公が日光へ詣るときの車窓の風景を、「列車の車輪がゴロゴロ鳴り、看板の大きな人物がさっと通り過ぎた。つまり絵に描かれた男女たちで、彼らは線路の側に立って、アメリカのオートバイ、ドイツのビール、イギリスの蓄音機を宣伝していたのである」<sup>24)</sup>と説明している。蓋し、近代日本の広告史の一齣と言えらる。

しかし何よりも異彩を放っているのは、ダウテンダイの花柳界に対する関心である。彼は早くも第1話「矢橋の帰帆」で吉原を紹介し（それどころか、遊郭は全て吉原と言うものと信じ込んでいる<sup>25)</sup>）、その後も何度かお茶屋や芸妓を登場させている。特に吉原については、街の入

口、通りの様子、通行人、郭の店構え、店の中の娼婦、彼女らの着物やしぐさなどを、ほとんど2ページ半に亘って、恰も店に上がった経験がなければ書けないほど具体的に、微に入り細を穿って描いている。

どの娘も自分の側に大きな火鉢を置いていて、その中には炭火の周りに木灰が入っている。彼女らは銀色の煙管を吸っているが、それには親指と人差し指が小さな玉に丸められるだけの、一つまみの煙草しか入らない。そして彼女らは、細い銀色の火箸ではさんだ一かけらの炭で煙草に火をつける。一人の娘は鏡の前で髪を整え、他の娘は筆で、長い帯状のライスペーパーを膝の上に載せて手紙を書いている。また別の者は、指キャップの大ききの湯呑みからお茶を飲んでいる。また一人は扇子を扇ぎ、一人は小さな小型本で長編小説を読んでいる。ある者は三味線を弾き、別の者がそれに合わせて歌を口遊んでいる。ある者はちょこちょここと格子の所まで歩いて来て、注意深く三枚重ねの裾を持ち上げ、2、3人の客にそっと流し目を送る。ある者は格子の所へやって来て、訪問の為に表に立っている母親や兄弟と親しげに控え目におしゃべり<sup>26)</sup>をしている。

また第6話「石山の秋月」では、石山のお茶屋の、„ウサギ目“という名の芸妓に接待される様が刻明に描かれる。

客の前の床の上に、蓋のない漆の膳が幾つか立っている。これらに入れられて、焼き魚、ご飯、白和え、根菜、そして鳥肉数個が、ちょうど出来たてのほやほやで我々の前に配膳されたばかりだ。象牙の箸が婦人帽の長い留めピンのようにその横に置かれている。そして、客にサービスするように言われている„ウサギ目“は、食事が冷める前に、料理の湯気が消えてしまう前に、そして大きな金色の丸い月が水平線を離れる位に湖上に昇る前に、彼女の知っている、昇る月の話の一つを語らねばならない。その間客は、彼女の持つ二本の箸で、ご飯とおかずが満たされた薄い皿から、„ウサギ目“自身の手によって、子供みたいに常に二つ三つ食べ物を口に入れてもらうことになっている。そして、小さな湯呑みにはお茶を、同じく小さな湯呑みに焼酎を、あるいは、ヨーロッパのグラスには、バイエルンの醸造家によって東京で作られた日本のビールを壘からついで<sup>27)</sup>もらって、飲むのである。

なお興味深いことにダウテンダイは、吉原を語る所でも、石山のくんだりでも、二人称代名詞„du“およびその三格形の„dir“を、総称的人称 (generic person) として用い、それらに一般



的な意味を持たせている。この „du“ は、不定代名詞の „man“ で置換できるが、 „du“ を使用した方が読者の関心を惹きつけられるという効果がある。

### 3. 時事・時局問題

あの当時の時事的問題の中でダウテンダイが最大の関心を持ち、それ故最も多く紙数を割いている話題が、彼の来日の前年に終結した日露戦争（1904年2月～1905年9月）である。何しろ彼は、既に第1話「矢橋の帰帆」の第1ページでこの戦争を持ち出すのだ。「日本の、ロシアとの戦争が始まる<sup>28)</sup>ずっと以前に」と彼は語り始める。「西方からの外国人が邪悪なイナゴの大群のようにやって来て、男たちを殺し、女たちを拉致し、自分たちは国内に分散すると、日本で予想<sup>29)</sup>されている」と、主人公ハナケは友人たちから聞いていた。明らかに戦争前の、ロシア人に対する日本人の不安・恐れ、いわゆる「恐露病」である。が彼女らは他方、「西の悪魔たちを嘲る戯れ歌<sup>29)</sup>」を作って歌う。

第4話の「唐崎の夜雨」で筆は更に進む。主人公キリの父親は、湖上で異常な体験をして怯えている息子を迎えに行き行って言う。「キリ、お前は戦争に行かねばならんぞ……きょう日本はロシアと戦争を始めた、東シナ海の向こうの満州<sup>30)</sup>で。」しかし息子の出征に反対する母親は彼を逃亡させる。以後、彼の消息は完全に途絶える。戦争が終わったある真夜中、謎めいた侍夫婦が両親の前に現れ、父親に、キリには戦勝祝賀式の挙行される東京で再会できるだろうと告げる。言われた通り二人が東京に行くと、人々から尊崇に満ちた破格の歓迎を受け、彼らのキリが日露戦争で獅子奮迅の大活躍、七生報国ならぬ三十万生報国の働きを為し、あらゆる戦闘でロシア軍を粉砕した末、最期は、敵旗艦に忍び込み、これを日本艦隊の前に誘導して砲撃を受けさせ、艦もろとも沈んだ、と知らされる。そして今や軍神となったキリの遺品は戦争博物館の特別な場所に、しかもロシアの將軍クロパトキン<sup>31)</sup>の打ち砕かれ鹵獲された野戦用ベッドのすぐ側に展示されているという。

日露戦争に関わるまとまった物語は更に、第6話「石山の秋月」で、珍しく法螺話の形で展開される。これは、既述の人魚の話および禿げ頭の娘の話と同様、石山のお茶屋の芸妓によって語られるのであるが、戦争のことなど碌に知らないおもちゃ屋、ごぞ職人、炭焼き職人の三人の男が、自分の手柄話をおもしろおかしく披露するという体裁を取っている。一人目のおもちゃ屋が中国人を打ち負かした話をした後、二人目のごぞ職人が、ロシア人の膝から下は砲筒になっており、足には目がついていて滅法強かったが、真直ぐにしか進めなかったのが、彼らの歩く向きを変えてやると、一方は旅順港の海の中へ消え、他方満州からやって来ていた連中は北へ向かい、シベリア鉄道に乗ってサンクト・ペテルブルクまで戻ってしまったと言うと、

三人目の炭焼き職人は、ロシア艦隊をやっつければ恋しい女房の所へ帰れると思ひ、マッチと日本の新聞と炭とを幾つかずつ携えて旅順港まで泳ぎ渡り、そこで新聞紙から軍艦を作り、それに炭を煙突代りにして立て、マッチで火をつけて海に押しやると、ロシア軍はそれを日本艦隊と勘違いして撃沈した。その後、ロシア人が戦勝祝いで飲むアルコールの呼気が空中に充満したのを狙ってマッチで点火してやると、船から船へと火がついて、遂には艦隊も乗組員も爆発を起こして沈んでしまった、と話す。

これらの話は、如何にダウテンダイが日露戦争と日本人の対露意識に強い関心を抱いていたかの証左に他ならない。しかも彼は、悲運の將軍クロバトキンの名前まで出しているのである。衆知のように日露戦争は、極東の小国日本が海戦において勝利したのみならず、「当時世界無比と称せられたロシア」<sup>32)</sup>の陸軍をも、ヨーロッパ列強の注視の下で打ち破り、全世界を瞠目させた戦いであった。そしてまた、この勝利が東南アジアや南アジア、延いてはポーランドや北欧の民族主義運動にまで与えた影響は計り知れない。もともと他方、これが契機となって、それまでヨーロッパに見られた黄禍論が更に強まることにもなる。

日本の対露関係におけるもう一つの事件にもダウテンダイは触れている。それは、戦争に先立つ13年前の1891年5月11日に起きた「大津事件（湖南事件）」である。この日の午後1時30分、一行とともに歓待を受けた滋賀県庁を出て京都へ帰るために、人力車に乗って通りを進んでいたロシア皇太子ニコライ二世（1868—1918）に、警備中の巡査津田三蔵が抜剣して二度斬りつけたのである。<sup>34)</sup>ダウテンダイはこの出来事を、彼の作品の第4話「粟津の晴嵐」に織り込んでいる。大津の体操教師オーミヤは同僚のアマガタと一緒に生徒たちを琵琶湖に連れて行き、誤って全員溺死させてしまう。教職を捨て巡査になったオーミヤは、ロシア皇太子大津訪問の際上記のような事件を起こし、一度は捉えられるが、拘置所から逃げ出し行方不明となる。オーミヤは既に生徒溺死事故の後、同僚アマガタを殺害していたが、再び姿を現わし、アマガタと妻との間に生まれた息子を溺れさせ妻を絞殺した挙げ句、完全に行方知れずとなる。

#### 4. 異文化・異人種間の問題

『琵琶湖八景』の8つの物語の内、第8話の「比良の暮雪」が文学作品として最も出来栄が良い。と言うのは、そのテーマが大きく普遍的で、作品に真実性があり、情景描写も心理描写もすぐれていて、全体的によくまとまっているからである。更に物語の舞台の殆どが日本ではなく外国（＝外国航路の船上）であり、出発点がフランスのマルセイユ港である点もユニークである。

「貞奴一座」の座員としてヨーロッパ公演<sup>35)</sup>に参加した二人の日本人男性オクロとクツマは、

一座と別れ、二人のドイツ人女性を伴って、南仏の港から日本へ向けて帰国の船旅に出る。二人のドイツ人とは、オクロの若くて美しいプロンドの新妻イルゼと、„比良の暮雪“のような白髪を頂いている彼女の祖母である。「冒険の世界とエキゾチックな神秘<sup>36)</sup>」に対する憧れもあって日本人オクロについて来たイルゼは、当初は未来への夢も持っていた。しかし、「たった一つのことを彼女を不安にした。つまり次第に分かって来たことだが、アジア人というのは、5足す5は10というようなものではなく、5足す5が、ある時は千になり、ある時はゼロになり得るようなものなのだ。」<sup>37)</sup>結婚以来殆ど自分のことを気遣ってくれない夫に焦立ちを覚え、既に出帆後2日目、船が未だ地中海上にあつたとき、イルゼは、デッキチェアにすわっている夫の口からタバコを奪って不満をぶつける。

「あなた、どうしてあなたはタバコをふかしながらひと言も喋らないで楽しんでおれるの。私はあなたのタバコとその落ち着きが恨めしいのよ。私は未だ祖母のような落ち着いた老婦人ではありません。あの人は、あなたが側で黙ったまゝ何時間もタバコを吸っていても、眠り込むでしょうけどね。出来ることなら、私の首を絞めて海に投げ込むか、私に何か悪いことをしてくれた方がいいわ。でも私は、あなたが私の側でそんなに落ち着き払って無関心でタバコを吸っているのが嫌なの。私たちは未だお互いに知り尽くしていないけど。ただ、あなたが私よりもタバコを愛するのなら、それはまるであなたが私を裏切ったみたいだわ。」<sup>38)</sup>

夫オクロにとっては、心の落ち着きを与えてくれるものと愛の源泉とは別物である。彼は平然と突き放す。

「日本ではね、男が女を捨てない限り、常に女を愛しているということなんだよ。それに我が国では女たちは、一人の男が進まねばならない道、彼を男に仕立てる道については問わないんだ。」<sup>38)</sup>

「ぼくが君のものになったのではなくて、君がぼくのものになったのだよ……ぼくはぼくのまゝで、君によってのみ、より立派になったんだ。しかし君は我々の結婚以来、我々のアジア的概念で言うところと消滅してしまってもはや存在しないんだ。」<sup>39)</sup>

このような男尊女卑の考えをダウテンダイは、オクロの仲間クツマにも、イルゼの祖母との対話の中で語らせている。

「あなた方ヨーロッパ人は、男が一生涯女に仕え、自分自身よりも女を評価することを望まれます。我々アジア人は、女が男に仕え男に従うことを求めるのです。そして我々は発見するのです、これが男女間の愛と秩序をもたらすのだと。<sup>40)</sup>」

恐らくダウンテンダイは、1905年からの世界旅行で先ずアジアを訪れ、その風物・文物ばかりでなく人や思想にも接して、大いに東西間の文化・文明の相違を痛感し、更にアメリカに渡りヨーロッパに戻ってその気持を強めたことであろう。その後彼が『琵琶湖八景』を1911年に世に問うまで、西洋と異なる極東の世界を如何にこの作品の中に描出しようかと腐心したことは容易に推察できる。

このような異なる世界の、異なる文化・思想・世界観なら理解もできようし、場合によっては自家葉籠中のものとすることもできる。しかし、人種の肉体的特徴だけは変えようがない。

「比良の暮雪」のイルゼは、この点において破滅した。彼女は、夫の「小さなアジア人的な目」や「黄色い顔色」が気になっていたが、彼の思想に絶望するにつれ、そのアジア人的、日本人の身体的特徴に益々堪え難くなる。それでも船がインド洋を通過するとき、動物の天国のインドを思い浮かべて一旦は気を取り直すが、太平洋域に入って、日本人以上に肌が黄色く、切れ長の目をし、観骨の突き出た人種を見た途端、我慢の緒が切れヨーロッパに帰る決心をする。出港後始めて祖母のキャビンで寝たその夜、船同志の衝突事故が起り、彼女は海中に没する。

もともとダウテンダイ自身、「彼らの黄色い顔」、「かわいい黄色い肌の日本人」、「黄色い人種」、「一層黄色い人種」、「黄色い日本人」という風に、アジア人ないし日本人の皮膚の色を殊更に強調している。これは黄禍論につながりかねない危険性を孕んでいる。もし彼のこの作品がアジアあるいは日本で不評を買っているとすれば、この点にその一因を求められるかも知れない。

#### IV. 絵画的側面

およそ一つの文学作品がすぐれているかどうかは、例えば次のような基準で判断できるであろう。すなわち、1. テーマが明確であること、2. 深い思想性があること、3. 登場人物が個性的であること、4. 事件が新奇であること、5. 文章表現が巧みであること、等々。『琵琶湖八景』の一つ一つの作品が、これらの条件に照らし合わせてどのように評価できるかの詳しい分析は他日に譲るとして、この章では、『琵琶湖八景』の持つ絵画的性について検討したい。

8つの物語の内、風景ではなく音をストーリーの契機にしているのは、「唐崎の夜雨」と「三井の晩鐘」の2つだけである。これは、元の画題に由来する制約上致し方あるまい。残りの6

つの小品の中では、最後の二作、「瀬田の夕照」と「比良の暮雪」とが最も強く鮮やかに我々の視覚に訴えようとする。前者で作者は、„rot“(赤い) „Röte“(赤色) „Abendrot, Abendröte“(夕焼け) „rote Wolken“(茜雲)などの言葉を多用しながら、女性主人公がその中で徐々に息を引き取る夕焼けの背景を描こうとしている。恰も夕焼けの絵の額縁の中に、なんとかこの主人公を置こうとする作者の執着心が伝わって来るようである。後者では、結末に作中劇のような部分が挿入されており、イルゼの白髪祖母役として、舞台上で苦悩に満ちた不幸を表現したオクロが白髪の鬘をはずすと、自分の髪も、芝居の間のわずかの時間で „比良の暮雪“ のような白髪に変じていて、劇場全体を驚愕させ、畏怖の念を起こさせた、という物語で終わっている。

第5話「堅田の落雁」も、原画の印象的な構図に刺激を受けたのであろうか、基本的に強く絵画性を追求している。ただしこの作品は、絵画の世界を乗り越えて文字の世界にまで踏み込んでいる。京の絵師オイゾは、皇女の願いを受けて、堅田に飛ぶ雁と、山と木の線とが作るある文字(日本の文字)を絵にし、しかもその文字が、「私が目であなたを追うのは、あなたを愛しているから。でもあなたが目を外らすのは、私を愛していない証<sup>41)</sup>拠」という内容を表わしていなければならない。第1話の「矢橋の帰帆」でも同様のモチーフが用いられている。矢橋に近づいて来る3艘の舟の帆には異なった日本文字が書いてあって、それらはそれぞれ「私はあなたに挨拶をする」<sup>42)</sup>、「私はあなたを愛する」<sup>42)</sup>、「私はあなたを殺す」<sup>42)</sup>を意味するというのである。これはもはや文字の象徴性の問題である。

第7話「瀬田の夕照」で、ダウテンダイは独特の空間感覚ないし風景論を披露している。すなわちまず、

日本人の心は、彼らの清潔で、風通しがよく、空虚な(下線=筆者)紙の部屋と全く同様に温かい血が通っている。彼らの部屋には家具がなく、部屋のきれいな畳の床が全ての家具の代わりをしなければならない。畳の床は机、腰掛け、ソファー、そして安楽椅子を表わし<sup>43)</sup>……

という捉え方である。これは一つの日本住宅論とも名付けられるものであるが、最後のくぐり方は、「(日本人の生活形態の基本は床・畳の上に坐ることであるから)机や椅子の上でする仕事は全て畳の上でできる」という意味であろう。ダウテンダイはひょっとして日本では、主として比較的簡素な部屋を見たのかも知れない。しかしそれでも、ヨーロッパでは部屋中に家具をふんだんに配置するのに引き換え、日本の標準的和風建築の畳の部屋には、昔であればなおさら、

真ん中にも壁際にも家具を並び立てない。引用文中下線を施したように、ダウテンダイは、日本の部屋が「空虚である (leer)」こと、部屋の「空虚さ (Leere)」に特に注目する。以下、最も典型的な個所を引用してみよう。

多彩で自然な、部屋の装飾として障子の開いた所にあるのは、春の緑色、夏の黄色、秋の赤茶色、冬の青色の風景、通り過ぎる鳥たちの飛翔、動く雲や人間たちへの眺めである。何気なしに、空虚で（下線＝筆者、以下同じ）無色の部屋は、多彩な外界への愛着を育む。障子が開くとき、常にその中に現れる世界は、風景として、あるいは訪ねて来る人間として、空虚な部屋で一層生き生きとした印象を与える。どんな人間でも、空虚な壁の間の床の空虚の中に坐るとき、生きた絵になる。そのとき風景の全ての魅力が増大し、ヨーロッパの主婦にとって家具類がそうなるように、この魅力は家の住人にとっても大切になるのである。<sup>44)</sup>

これはまさに、ダウテンダイの絵画論もしくは風景論と言えるものであろう。彼は、視界の中の空いた空間、空の部分が必ずしも無意味ではないことを認識していたのである。実際にスケッチや水彩画を物していた彼が画家としても評価される<sup>45)</sup>のも首肯できる。なお、この „leer“ および „Leere“ の概念は既に、先に引いた 1906 年 5 月 12 月付の彼の手紙の中に見出される。<sup>46)</sup>

## V. 結び

一言で言えば、ダウテンダイの『琵琶湖八景』は贅沢な作品、欲張った作品である。何しろこれは、メルヒェンのエキゾチック＝エロチックな要素を持つ愛の物語の文学作品として、多くの日本の話題を織り混ぜながら、原画に倣って絵画作品でもあろうとしているからである。作品中、日本人にとって必ずしも快適でない表現が散見することは否めない。しかしこの点は、日本および日本人のことが未だ余り西洋人に知られていなかった時代に来日したドイツの一市井人の、驚きと戸惑いの混じった観察の結果と見れば、容認できよう。

ダウテンダイは我が国では既に戦前に読まれてはいた。が、研究に関しては戦後も殆ど為されていないばかりか、翻訳に至っては皆無に近い状態である。今後は、詩人・小説家・劇作家としてのダウテンダイのみならず、『近江八景』から『琵琶湖八景』の着想を得た画家ダウテンダイの才能と素質にも着目した研究が必要であろう。

Text :

Dauthendey, Max : *Die acht Gesichter am Biwasee*. Erste Auflage 1994. Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main.

注

- 1) プロイセンはやがて普仏戦争 (1870 年) でも勝利を収め、ドイツ帝国を成立させることになる (1871 年 1 月 1 日)。一方東アジアでは、清朝中国が太平天国の乱後も英仏露米などからの外圧を受けて政情が安定せず、日本も 1867 年当時、明治維新直前の騒乱状態にあった。
- 2) 金田昌司 「国際交流時代と姉妹都市づくり——大津・ヴュルツブルク (独) 姉妹都市づくりを中心に——」 (中央大学経済学研究会 『経済学論叢』 第 40 巻第 5・6 合併号 2000 年 3 月 228 ページ)
- 3) Text, S. 73.
- 4) Text, S. 116.
- 5) Text, S. 109.

- 6) すなわち、「事実また 300 メートルの長さの毛綱が、奉納された毛髪から編まれた。そして、男の腕の太さを持ったこの黒い綱は今日なお、漆塗りの樽に入れられて京都のその寺に保管されている」の記述 (Text, S. 117f.)。

東本願寺の毛綱は、1880 年 (明治 13 年) から 1895 年 (明治 28 年) まで行われた両堂 (御影堂と阿弥陀堂) の再建に際し、用材の運搬や工事のために、全国各地の信徒が作って奉納したものが一般に知られている。1889 年 (明治 22 年) 7 月 20 日付の、真宗大谷派機関誌「宗報」第 49 号の「再建作事部報告」によれば、北は「羽後國」から、南は「豊後國」までの広い地域から、総計 53 本の毛綱が寄進され、用材運搬中に消耗した 29 本を除く 24 本が未だこの時点で残っており、その内最大のものは、長さ約 93 m、太さ (周囲) 40 cm、重さ 1.05 トン、とのことである。真宗大谷派宗務所出版部 (東本願寺出版部) 『本山報告 (一)』 「宗報」等機関誌復刻版 3 昭和 63 年 603 ページ

当時来日した外国人で、東本願寺の再建工事現場や巨木の用材、彫刻、毛綱などを見て感動した者は少なくなかったらしい。前掲書『本山報告 (一)』の 604 ページには次のような報告文が見られる。「右毛綱ニ關シ魯西亞國ヒットバアフ、ウークリイ、デス、パッチ雑誌ニユフジャーナル者著作ニ係ル長歌ヲ載セ東方婦女ノ信仰ヲ表示セルモノト評セリ 又本月八日米國博士ヱイ、エム、ロー氏來山我等本國ニ在リシ時ニハ日本佛教ハ頗ル委微セシ者ト想ヒシカ渡來以後貴國ノ現況及貴山再建上棟ノ盛式其他毛綱等ヲ見聞シ大ニ事實ニ相違シタルヲ發見シタルニ付毛綱ニ筋ヲ拂ヒ受ケーヲ倫敦府一ヲ新約克 (ニューヨーク=ママ) 府ノ博物館ニ寄セ度旨申出ラレタルモ該品ハ全ク信徒ノ熱心ニ出テ漫ニ讓與シ難キヲ以テ右員數丈尺等ノ詳細書並ニ寫眞ヲ同氏ニ贈付スル筈ナリ」 従って、東本願寺両堂再建の約 10 年後に来日したダウテンダイが毛綱の話に接し関心を抱いたとしても、何ら不思議なことではない。

なお、1929 年 (昭和 4 年) には、文部省の「教化総動員計画」の意に沿った「社会教化宣伝映画」『毛綱』が制作され、「昭和四年度だけで全国各地で総計四百二十六回の上映」が行われたのみならず、翌 1930 年 (昭和 5 年) には、当時日本が支配していた「朝鮮」全土で巡回上映され「た」と言う。真宗大谷派宗務所 『教化研究』第 95・96 号 1988 年 419-422, 663-668 ページ

- 7) Text, S. 131. 三十三間堂の仏像は十一面千手千眼観世音菩薩。丈六坐像一体 (中尊) と等身立像一千体がある。
- 8) Text, S. 131.
- 9) Text, S. 134.
- 10) Text, S. 140.
- 11) Text, S. 141.

- 12) Text, S. 134.
- 13) Text, S. 118, 120.
- 14) Text, S. 120. なお、東本願寺の本尊は阿弥陀如来である。
- 15) Text, S. 131.
- 16) 福田アジオ他編 『日本民俗大辞典』 上 1999年 吉川弘文館 393ページ
- 17) 山折哲雄 『神と仏』 1983年 講談社(現代新書) 20ページ
- 18) 金田, 228ページ
- 19) Text, S. 10.
- 20) Text, S. 12.
- 21) Text, S. 27.
- 22) Dauthendey, Max : *Sieben Meere nahmen mich auf, Ein Lebensbild*, München・Wien 1987, S. 231  
(以下, *Sieben Meere* とする。)
- 23) Ibid., S. 231f.
- 24) Text, S. 139.
- 25) Text, S. 28.
- 26) Text, S. 30.
- 27) Text, S. 109.
- 28) Text, S. 9.
- 29) Text, S. 10.
- 30) Text, S. 52.
- 31) 開戦直後の1904年2月21日, ロシア満州軍総司令官として着任。日本軍より多い兵員数を有しながら, 遼陽, 沙河, 黒溝台および奉天の会戦で次々と敗れ退却した。
- 32) 黒羽茂 『日露戦争はいかにして戦われたか』 1988年 文化書房博文社 7ページ
- 33) 井口和起 「日露戦争」(同編『近代日本の軌跡 3 日清・日露戦争』 1994年 吉川弘文館 95ページ), 黒羽茂 同上書 185ページ以下
- 34) 尾佐竹猛 『大津事件——ロシア皇太子大津遭難——』 1997年 岩波書店(岩波文庫) 50ページ
- 35) ダウテンダイが来日するまでの, 川上音二郎・貞奴一座のヨーロッパ巡業は, 1回目が1900年(明治33年)に(アメリカから移動してロンドン, パリで), 2回目が1901~02年(明治34~35年)に(イギリス, ドイツ, フランス, スペイン, ポルトガル, イタリア, オーストリア, ハンガリー, ベルギー, ポーランド, ロシアで)行なわれている。井上精三 『川上音二郎の生涯』 1985年 葦書房 88, 89, 150ページ
- 36) Text, S. 150.
- 37) Text, S. 149.
- 38) Text, S. 151.
- 39) Text, S. 152.
- 40) Text, S. 160.
- 41) Text, S. 95.
- 42) Text, S. 11.
- 43) Text, S. 129.
- 44) Text, S. 130.
- 45) Ueding, Gert : *Weltfremdheit und Weltsehnsucht. Der Erzähler Max Dauthendey*, in : ders. : *Die anderen Klassiker, Literarische Porträts aus zwei Jahrhunderten*. München 1986, S. 184.



46) *Sieben Meere*, S. 231.

#### 参考文献

『近江八景之内, 大判錦絵』

廣重諸国名所[4] 学習研究社 昭和51年(廣重北齋諸国名所絵集:[1])

林健太編 『ドイツ史』(増補改訂版第2刷) 1992年 山川出版社

皆川三郎編 『日露戦争海外写真集』 1990年 新人物往来社

『歴史と旅 臨時増刊 近代日本戦史総覧』 1989年 秋田書店

真宗大谷派宗務所出版部編 『両堂再建(りょうどうさいこん)』 1997年

『古寺巡礼 京都』 14(宇佐見英治ほか著): 妙法院, 三十三間堂 昭和52年; 24(大庭みな子ほか著):

清水寺 昭和53年 淡交社

Wilpert, Gero von: *Deutsches Dichterlexikon*, Stuttgart 1988

Lutz, Bernd (Hrsg.): *Metzler-Autoren-Lexikon*, 2., überarb. und erw. Aufl. Stuttgart 1994

»*Neue Deutsche Biographie*«, 3. Band Berlin 1957

#### 付記

東本願寺の毛綱に関しては、真宗大谷派(東本願寺)教学研究所の水谷英順氏より貴重な文献の提供を頂いた。記して謝意を表したい。